

子どもの豊かな人間性をはぐくむ 家庭教育の支援の在り方

長期研修員 左 川 康 彦

Sagawa Yasuhiko

要 旨

子どもの豊かな人間性をはぐくむためには、家庭の教育力向上が求められる。そのためには、学校からの家庭教育の支援も必要である。そこで、学校の教育力を生かし、家庭や地域との連携を密にした様々な家庭教育の支援の在り方について考察する。

キーワード： 対話、協調、信頼、連携、家庭教育支援

1 はじめに

家庭教育は、それぞれの家庭で行われる教育であり、すべての教育の出発点である。この教育によって、子どもの豊かな情操や行動力、協調性、自尊感情、思いやりなどが培われる。しかし、近年、少子化・核家族化・地域の結び付きの希薄化など、家庭や家庭を取り巻く環境が著しく変化する中で、子育てや子どもとのかかわりに悩みや不安をもつ親が増えている。

また、いじめ、不登校、虐待など子どもを取り巻く環境も著しく変化する中で、家庭の教育力も低下していると言われている。このような状況の下、子どもが夢や希望をもって、すこやかに成長することを保障するためには、学校と家庭や地域との連携を密にすることが不可欠である。そこで、子どもの豊かな人間性をはぐくむために、地域と連携した学校からの家庭教育の支援の在り方について考える。

2 研究目的

子どもの豊かな人間性をはぐくむために、家庭・学校・地域の連携を踏まえた学校からの家庭教育の支援の在り方を考える。

3 研究方法

- (1) 先行研究に関する調査研究
- (2) 家庭教育における現状と課題
- (3) 家庭の教育力向上のための学校からの支援

4 研究内容

- (1) 先行研究に関する調査研究

子どもにとって家庭は、自己をつくる大切な場で心の居場所である。子どもは、親に依存したり親から自立したりすることを繰り返しながら豊かな人間性を持った大人へと成長していく。「日本の子育て物語」(上笙一郎氏)によると、現在の子どもの特徴として、労働の猶予、心身の不安定さ、子ども期(自立期)の長期化などを挙げ、自主性や自立心が育っていないと指摘されている。また、子育ての原点である家庭は、生産の場から消費の場へ変わるとともに仕事も家庭とのかかわりなしにできるようになった。また、核家族化や地域との結び付きの希薄化などにより、孤立しがちで相談する子育て経験者

が周りにいないため、子育てや子どもとのかかわりに関する悩みや不安をもつ親が増えるなど、昔とくらべ様変わりしている。このように、家庭や地域の変化が、子どもを健全に育てるための家庭教育の難しさをもたらしているため、家庭での子育てや地域ぐるみの子育てなど、様々な視点にたった家庭教育の支援が求められている。

(2) 家庭教育における現状と課題

ア 子どもの生活実態

本来、豊かな心や道徳心は、親からの働きかけなど、生活環境が大きく影響し、生活経験を重ねるにしたがって身に付いていくものである。

平成14年度の小学5年生と中学2年生を対象にした奈良県教育委員会の「家庭教育アンケート調査」(以下、「アンケート調査」という)によると、家庭における自由な時間の過ごし方では、年齢とともに

「外で過ごす」割合、「友だちと過ごす」割合が減少する傾向にあり、50%を大きく割っている(表1)。また、今までに生活体験したことをたずねると「ナイフや包丁で果物の皮をむく」以外の項目で、小学5年生より中学2年生の方が減少傾向にあり、特に、「近所の人から注意される」ことは、極端に少ない(表2)。更に、平成12年度の保護者対象「アンケート調査」によると、毎日、子どもと「話」をする時間はあるように見受けられるが、「遊ぶ」時間があまりないという現状である(表3)。このような調査結果から、日常生活で社会性を身に付け、豊かな心をはぐくむための経験の減少が懸念される。

イ 保護者の意識と子どもを取り巻く地域の実態

平成12年度の保護者対象「アンケート調査」によると、「子育てに困ったり不安に思うこと」の一番は、「友人関係(友だち、いじめなど)」である(表4)。一世代前の保護者は、基本的な生活習慣を身に付けることなどに注意を払ってきたのに対し、今の保護者は、集団生活の中でわが子が、人間関係を上手につくるかどうかや子どもの性格や情緒に注意を払っている(表5)。

また、平成14年度の小学5年生と中学2年生対象「アンケート調査」によると「近所の人

表1 家庭教育アンケート調査(平成14年度 奈良県教育委員会)
「家庭における時間の過ごし方」から
「自由な時間があるとき、何をして過ごしていますか」

	小学5年生 (%)	中学2年生 (%)
外で過ごす	32.3	15.8
室内で過ごす	62.0	77.1
1人で過ごす	55.1	65.3
友だちと過ごす	39.2	27.6

表2 家庭教育アンケート調査(平成14年度 奈良県教育委員会)
保育所や幼稚園のころから今までに次のようなことをした
ことがありますか(よくある+時々ある) (%)

	小学5年生 (%)	中学2年生 (%)
ナイフや包丁で、果物などの皮をむく	53.3	59.8
料理を作る手伝いをする	70.7	57.9
自分の上ぐつを洗う	57.5	50.9
保育所や幼稚園ぐらいの小さいこどもと遊ぶ	52.5	34.2
えさやりなど、動物の世話をする	64.0	49.7
水やりなど、植物の世話をする	57.7	36.2
友だちとけんかをする	50.5	38.2
近所の人から注意される	11.0	5.2
近所の人からほめられる	49.5	31.9
地域の祭りや行事に参加する	80.0	64.6
昆虫をつかめる	46.6	23.0
魚やをつる	37.0	25.7
夜空の星を見る	56.1	43.1

表3 家庭教育アンケート調査(平成12年度 奈良県教育委員会)
子どもの遊びと親子のふれあい (%)

	子どもと遊ぶ時間 (%)	子どもと話をする時間 (%)
ない	10.8	0.3
あまりない	53.2	7.7
まあまあある	30.2	26.4
(よく)ある	5.8	65.7

表4 家庭教育アンケート調査(平成12年度 奈良県教育委員会)
子育てで困ったり不安に思うこと (%)

友人関係(友だち、いじめなど)	67.7
将来(進学、就職など)	50.8
反抗期のしつけ	50.4
成長(身体、情緒、知的発達)	28.2
健康(アトピー、ぜんそくなど)	20.1
子育てに関する夫婦の考え方	13.8
自分自身の時間がない	11.1
祖父母の関わり方	8.9
家族の協力	7.3
生活習慣(排便、衣服の着脱など)	6.9
困ったときの相談相手がいない	2.8
子どもを預ける施設	2.3
その他	4.4

表5 家庭教育アンケート調査(平成12年度 奈良県教育委員会)
一世代前の親と今の親の「しつけ観」の比較 (%)

	親から言われた (%)	子どもに言う (%)
基本的なしつけ(あいさつ、行儀、礼儀作法)	80.0	76.1
生活習慣(家の手伝い、靴をそろえる、整理整頓など)	50.8	33.3
食事と食生活(好き嫌いせず食べる、箸や茶碗の持ち方など)	39.7	33.0
性格・情緒(やさしさ、素直、わがままなど)	32.7	43.6
身体の発達や健康・安全(姿勢が悪い、車に用心など)	31.6	35.0
集団生活(友だちと仲良く、きょうだいげんか、いじめなど)	22.1	49.7
知的発達(本を読みなさい、勉強、よく遊びよくまなびなど)	21.9	20.5
親子関係(親に口答えしない、子どもをよくほめるなど)	13.3	6.0

からほめられる」や「近所の人からしかられる」といった、地域の大人がほかの子どもに対しても自分の子どもと同じように世話をしたりしかったりするなどの地域の人とのかかわりが減少している（表6）。

表6 家庭教育アンケート調査（平成14年度 奈良県教育委員会）
経験に関すること (%)

	小学5年生	中学2年生
地域の祭りや行事に参加する	80.0	64.6
近所の人からほめられる	49.5	31.9
近所の人からしかられる	11.0	5.2

ウ 教職員の家庭教育に対する意識の実態

平成13年度の教職員対象「アンケート調査」によると、「友だちを思いやる」ことや「人のものをほしい」と思ってもがまんができる」、「人の話をきちんと聞く」ことなどは、8割以上の教職員が主に家庭で身に付けさせるべきであると考えている。また、「親同士の話し合いや交流の場の設定は、主に親たち自身が工夫すればよい」、「親子で体験したりコミュニケーションを深めたりする場の設定は、主に親たち自身が工夫すればよい」と思っている教職員も少なくない。しかし、「教員からの親に対するアドバイスは、子どもの健やかな成長に役立つ」、「個々の家庭への働きかけは、家庭教育の支援に役立つ」と思っている教員が多く、教職員は、子どもの教育だけをすればよいと思っているのではなく、親から相談されなくても子育ての悩みの相談にのることも必要であると感じている。（表7、8）。つまり、教職員は、親たち自身の工夫を期待しつつも、地域における大人同士のつながりも希薄になりつつある今、大人も子どもも含めた交流の拠点の場を学校が提供していかななくてはならないと考えているといえる。

表7 家庭教育アンケート調査（平成13年度 奈良県教育委員会）

あなたは、子どもたちに関する次のようなことは、主に家庭で身に付けさせるべきだと思いませんか。（%）

	まあまあ・とても思う	あまり・まったく思わない
友だちを思いやる	84.6	14.4
友だちと仲良くする	83.9	17.7
人のものをほしいと思ってもがまんができる	93.8	5.3
人の話をきちんと聞く	92.7	6.7

表8 家庭教育アンケート調査（平成13年度 奈良県教育委員会）

あなたは、家庭教育とのかかわりに関する次の項目についてどうお思いになりますか（基準 4：とてもそう思う 3：まあまあそう思う 2：あまりそう思わない 1：まったくそう思わない）

教員からの親に対するアドバイスは、子どもの健やかな成長に役立つ	3.24
家庭での親と子のかかわりを援助することは、教員の役目である	2.89
教員は、子どもの教育だけをすればよい	1.74
教員は、親から相談されたときに限って、子育ての悩みの相談にのればよい	1.95
教員が家庭の問題にかかわっても、状況は変わらない	2.28
学校での子どもの様子を親に知らせるのは有意義である	3.54
家での子どもの様子について、親から話を聞くことは有意義である	3.60
学級懇談会、面談会等の充実を図ることは、家庭教育の支援に役立つ	3.33
P T A活動の充実を図ることは、家庭教育の支援に役立つ	2.98
地域の諸団体と連携することは、家庭教育の支援に役立つ	3.10
家庭教育学級の充実は、家庭教育の支援に役立つ	3.00
学級たよりなどの配布物は、家庭教育の支援に役立つ	3.13
家庭教育についての職員研修は、家庭教育の支援に役立つ	3.04
個々の家庭への働きかけは、家庭教育の支援に役立つ	3.14
親同士の話し合いや交流の場は、主に親たち自身が工夫すればよい	2.61
親同士の話し合いや交流の場は、主に学校が工夫すればよい	2.23
親同士の話し合いや交流の場は、主に行政等が工夫すればよい	2.21
親子で体験したりコミュニケーションを深めたりする場の設定は、主に親たちが工夫すればよい	2.73
親子で体験したりコミュニケーションを深めたりする場の設定は、主に学校が工夫すればよい	2.29
親子で体験したりコミュニケーションを深めたりする場の設定は、主に行政等が工夫すればよい	2.44

エ 課題

アンケート調査から、子どもの豊かな人間性をはぐくむためには、様々な場でよりよい人間関係を築いていけるようにすることや社会性を身に付けさせなければならないこと、また、保護者は子どもの友人関係づくりに深い関心があり、子どもに社会性を身に付けさせたいという意識が強いということが明らかになった。

しかし、地域での保護者同士のつながりが希薄なことや地域で相談できる人が少ないため、子育てに不安や悩みを抱え、学校で社会性を身に付けてほしいと願う保護者が増えている。また、教職員が、保護者との連携や対応に苦悩していることも多い。そのため、子どもを取り巻く大人が、家庭・学校・地域の信頼関係を構築しながら、それぞれの場でそれぞれの役割を果たし、協力し合って子どもを育てなければならなくなっている。つまり、子どもの豊かな人間性をはぐくむためには、家庭・学校・地域の信頼関係を基盤として連携しながら、子どもをもつ家庭を支援することが求められているのである。

(3) 家庭の教育力向上のための学校からの支援

ア 学校から家庭への支援の在り方

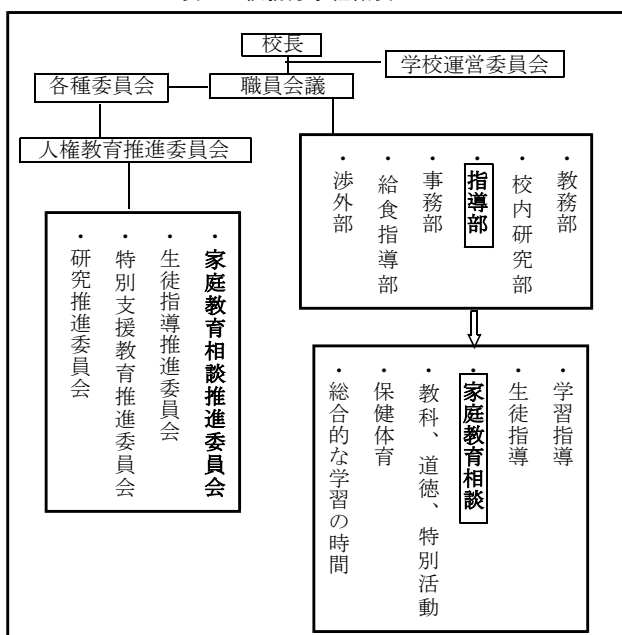
(7) 学校からの情報発信

学校の経営方針や子どもたちに「付けたい力」などを、PTA総会や家庭訪問、校区自治会などの機会に説明し、子どものすこやかな成長のために学校がどのように取り組んでいくのかについて保護者や地域の人々に理解と協力を求める。そして、学校長をはじめ教職員は、共通理解のもと、一丸となり、子どもの成長には、学校だけでなく、家庭や地域の教育力が必要であることを保護者や地域の人々に理解してもらうために取り組まなければならない。子どもを取り巻く環境が著しく変化する中、これからの学校には、子どもの学びを大切にしながら継続的な教育課程を創造するために、家庭・地域との密接な協働関係を築くことが求められている。

a 校務分掌への位置付け

校務分掌の中に、保護者への子育て支援の方途を考え実践する家庭教育相談推進委員会（仮称）を設置する。この委員会は、校長・教頭・教務・家庭教育相談主任・養護教諭・各学年の代表で構成し、学期に1回、家庭教育の支援に向けた校内研修をもつ。各学年から子ども・保護者の実態を出し合い、子育て支援の必要な家庭や保護者を把握し、具体的な支援の在り方の案をつくり校内研修で深める。また、月1回子育てにかかわる「学校だより」を発行し、子育てに関する保護者の意見を求め、学校・家庭のそれぞれの役割を明確にしていく委員会とする。保護者の子育てに対する悩みなどを共有し、子どもへの指導に当たっているが、十分に機能しなかったり、保護者への対応や子育てに対する支援で苦悩していたりする教職員も少なくないため、この委員会を校務分掌に位置付け教職員が一丸となった子育て支援ができる体制をつくる(表9)。

表9 校務分掌組織表



b 家庭訪問の見直し

これまでの家庭訪問は、保護者から家庭における子どもの実態を把握することを目的に行われてきた。これからの家庭訪問は、家庭と学校の役割を明確にし、少なくとも年2回の訪問によって、ともに役割を果たしていくための話し合いの場とするべきであるとする。1回目（年度当初）は、保護者から家庭における子どもの実態を把握するとともに、学校や学級の経営方針を示した学校要覧の内容を伝え、学校の取組をより一層理解してもらう機会とする。その上で、学校における子どもの実態を知ってもらうために、オープンスクールや授業参観・懇談会を実施する。2回目（夏期休業中）は、子どもの実態を保護者と共通理解し、家庭と学校が同一歩調で子育てをするための手立てを話し合う。

c 学期に一度のオープンスクールの実施

保護者は、子どもの学校生活の様子について強い関心をもっている。子どもが「真面目に授業を受けているのだろうか」「友人関係はうまくいっているのだろうか」といったことをいつも気にしている。ふだんの学校生活の様子をより多くの保護者や地域の人々に知ってもらうために、自由な時間に目的意識を

<観察カード例>

- ・授業の初めと終わりに、立ってきちんとあいさつをしているか。
- ・授業中の学習態度はどうか。
- ・教師や仲間の話をよく聞いているか。
- ・学習（掃除、遊放時も含）活動に活気がみられるか。
- ・授業中や学校生活中での子どもの発言はどうか。
- ・友達とのかかわり方はどうか。

<保護者は、授業参観から学習参画へ>

もって学校参観してもらおうオープンスクールを実施する。実施に当たっては、年度当初の学級懇談会などで、保護者が目的をもって学校参観できるように、子どもの学習の様子を観察するための手立てを保護者に予め伝えておく。

表10 オープンスクールの実施内容（例）

1学期(水曜日)		2学期(土・日曜日)		3学期(金曜日)	
朝の会(読書タイム)		朝の会(1分間スピーチ)		朝の会(集会活動)	
1限	学級会(家族について)	1限	学級会(友だち関係について)	1限	学級会
2限	道徳(心のノート)	2限	道徳(心のノート)	2限	道徳(心のノート)
業間	遊びの様子	業間	遊びの様子	業間	遊びの様子
3限	授業に保護者が参加 (総合・生活科)	3限	授業に保護者が参加 (総合・生活科)	3限	授業に保護者が参加 (総合・生活科)
4限	各教科	清掃	親子・地域の人々で実施	4限	各教科
給食	給食参観	終わりの会		給食	給食参観
清掃	親子で実施	保護者・地域の人々と下校		清掃	親子・地域の人々で実施
	保護者参観	保護者・地域の人々参観			保護者・地域の人々参観

保護者は、授業参観のたびに観察カードに記入することで、子どもの変容が見えるようになる。学校は、子どもの実態を保護者に伝え、子どもがもつ様々な課題を共有することが大切である。オープンスクールを実施するに当たり、保護者や地域の人々も授業や清掃などに参加して、子どもと一緒に活動できるような内容とする。なぜなら、共同体験は、子どもにとって生きた学びとなり、保護者や地域の人々にとっても子育ての楽しさにつながるからである。また、父親や地域の人々の子育てに対する意識の高揚を図るために、多くの父親や地域の人々が学校参観できるように土・日曜日に実施する。このように、教職員が一丸となり、子どもと保護者や地域の人々が共に活動できる機会の提供となるオープンスクールを目指したい(表10)。

(4) 学級懇談会の充実

P T Aの学級委員と教職員が、これまで以上に連携をとりながら運営する学級懇談会の充実を目指す。授業参観の後、学級懇談会に残る保護者は少ないのが現状である。学級懇談会は子育て支援の場であり、教職員、保護者及び保護者同士が情報交換できるよい機会である。学級懇談会の充実を図るためには、まず、保護者の学級懇談会に対する意識を高めることである。その手立てとして、P T A学級委員と教職員で「懇談テーマ」を決める。また、一人一人の保護者が、授業参観やオープンスクールで記録した観察カードや家庭・地域での子どもの活動の様子を記録したシートを基に、子育ての情報交換ができる学級懇談会にする。

<懇談テーマ例>

- ・子どもの心を、確かにつかむためには
- ・子どものよさを認め、励まし合う子育てとは
- ・授業参観や学習参加を生かした子育てとは

イ 地域と連携した家庭への支援の在り方

(7) 「地域・親子ふれあいタイム」の実施

家庭と地域の人たちのふれあいは、子どもの人間形成において大切なことである。P T Aと学校と地域の自治会の共催で「地域・親子ふれあいタイム」を実施する。この活動を通して、親と子どもの信頼関係や人間関係の大切さ、社会規範の必要性などが実感でき、地域に対する愛着が生まれ、自分たちの地域を大切にしようとする心が培われるものと考えられる。

(4) 地域とともに子育て支援を行う「地区別懇談会」

置籍校では、例年、P T A主催の「地区別懇談会」と校区人権教育推進協議会主催の「地区別懇談会」に分けて実施している(表11)。子育て支援は、学校や地域の教育力の果たす

表11 校区人権教育協議会組織(全地域住民対象)

- ・校区総代会・老人会・小, 中学校P T A・校区補導会
- ・校区女性婦人会・校区子ども会・児童民生委員会
- ・学校(事務局)

役割が重要であることをP T A役員会と校区人権教育推進協議会役員会に提案し、地域ぐるみでの子育て支援を考える「地区別懇談会」の開催を目指す。校区人権教育推進協議会役員会で、懇談テーマ(例: 地域で子どもを育てよう)を決め、各大字ごとに教職員とP T A地区役員、地域の自治会長、児童民

生委員が「地区別懇談会」のテーマ（例：子どものしつけを地域の力で、子どもの活動を保障できる地域活動について、子どもの安全確保など）を決めて実施する。その際、子どもの実態にあわせたテーマを設定するように心がける。また、地域ぐるみで子育て支援を推進するために、大字ごとの「地区別懇談会」で話し合われた内容を役員会で総括し、地域の人々に情報を提供する。

(ウ) 子育てなやみ相談室の開設

学校支援ボランティアの中に「子育て支援ボランティア」を募集し、「子育てなやみ相談室」を学校に開設する。これは、月1回第3月曜日の午前・午後に分けて、教職員で構成する家庭教育推進委員と連携して実施する。このような活動を通して、同じ悩みや不安をもった保護者同士の交流はもちろん、教職員からの子育て支援などが期待できる。このような地域と連携した子育てネットワークづくりが必要であると考え（表12）。

表12 地域の人々による学校支援ボランティア活動

学校支援ボランティアの活動 ・毎週水、木曜日 10分間読み聞かせ読書支援 ・地域学習支援、平和学習支援、伝統文化学習支援 ・校内環境美化支援 ・クラブ、委員会活動支援 ・登校、下校安全確保支援 ・なかよし学級支援 ・ 子育てなやみ相談支援

5 研究結果と考察

子どもは、豊かな体験と多様な人間関係の中で、豊かな心や基本的な生活習慣などを身に付けたり、豊かな人間性をはぐくんだりしていく。しかし、社会の変化が著しい中、子どもを取り巻く環境や家庭・地域の教育力を考えると、それらは十分に機能していないのが現状である。子どもの豊かな人間性をはぐくむためには、子どもに関心を持ち積極的にかかわろうとする意識の高揚と意欲的な行動が子どもを取り巻く大人に一層求められていることを改めて認識した。教職員は、子育て支援の立場を認識し、一丸となり、学校の教育力を生かして、家庭やPTA・地域との連携を図っていかなくてはならない。このように、学校からの取組が、子どもの豊かな人間性をはぐくむための家庭教育の支援になっていく。

6 おわりに

子育ての最も重要な基盤は、親の愛情としつけの調和である。家庭教育は、家庭の責任において、それぞれの親の意思や価値観によって行われるとともに極めて私事的な性格をもっている。家庭教育の支援に当たっては、多様化した個々の家庭教育の在り方を考慮して、できる限りそれぞれの家庭に即した柔軟な対応が求められる。つまり、学校・地域・家庭が対話と連携をモットーに、保護者の主体性を大切に、よりよい子どもの成長を願うよきパートナーとしての役割が重要である。これからも、保護者とのよい信頼関係を築きながら、家庭・学校・地域との連携の在り方を再考し、子どもの豊かな人間性をはぐくむため、教職員が一丸となった学校づくりを目指したい。

参考・引用文献

(1) 日本子育て物語	上笙一郎編	岩波書店	1991
(2) 新しい家庭教育	玉井美知子編	ミネルヴァ書房	1993
(3) こころの子育て	河合隼雄編	朝日新聞社	1998
(4) ゆらぐ家族と地域	大塚信一編	岩波書店	1998
(5) 平成12年度家庭教育アンケート調査報告書	奈良県立教育研究所	奈良県教育委員会	2001
(6) 平成13年度家庭教育アンケート調査報告書	奈良県立教育研究所	奈良県教育委員会	2002
(7) 平成14年度家庭教育アンケート調査報告書	奈良県立教育研究所	奈良県教育委員会	2003
(8) 子ども生活実態基本調査報告書	B e n e s s e 編	ベネッセコーポレーション	2005
(9) 学校、家庭、地域がともに進める学力づくり	佐藤晴雄編	教育開発研究所	平17
(10) 京都発地域教育のすすめ	京都市教育委員会	ミネルヴァ書房	2005